

『大日経』の諸儀礼について

研究生 蓮舎 経史

『大日経』が大乗から密教の展開におおきく影響していることは間違いない。そのため本経の研究、とくにその成立を検証することにはおおきな意義がみいだせる。

発表者の最終的な研究目的も本経の成立過程を明らかにしようとするものであり、その具体的な対象を経典中に散見される諸儀礼として、その調査を進めていくつもりである。ここではそれら儀礼形成の背景にあるとおもわれる字門に目を向けていくこととする。

『大日経』は大毘盧遮那の成仏の境界をさまざまに形を変えて(神変)顕現させる(加持)というものであり、具体的には「マンダラ」を顕すといっている。つまり不可知であるはずの法を、衆生にも認識できるように随順して出現させるのである。

それは加持という機能でマンダラとして顕現させるとまとめることができる。つまりマンダラとは不可知である法の「仮」の姿ということになる。

その現実的な作業は阿闍梨によつてなされるが、それには阿闍梨と法を同一化するという課程の必要性が導かれる。つまり衆生救済の為の実践としてマンダラ行を施行するために、肉身の指導者である阿闍梨の成仏を実現することが必要となる。これは言い換えれば仏が「仮」に阿闍梨の姿をとるということであり、本経中で説かれている多く

の儀礼はそのための阿闍梨からの働きかけと考えられる。そして、その多くは種字を利用した観想行とみられるのである。

これらの種字は字義をもつて説明される。一群の字母に意義を附して列挙するいわゆる字門は多くの経典にみられる。それは音節の順番やその字義によつて、般若部および華嚴部に代表される四十二字門と涅槃部や仏伝部にみられる五十字門に大別されている。

『大日経』では「具縁品」においてひとつひとつの文字の解説がされている。ここでは音節順では五十字門系となるが字義は四十二字門系によることがいえる。しかし、使用字数は三十四字と定型とは異なる。そのため先行研究では五十字門、四十二字門、三十七字門などいくつかの見解が示されている。

また、『大日経』の代表的な観法である、いわゆる「五字厳身観」では a, va, ra, ha, kha の五字を五大に関連させた観想をもとめ、あるいは「布字観」に対して『広釈』では三十二字の布置を三十二相と一致するとの解釈もされる。このように、具体的な儀礼に使用される際の種字は字門で示された字義との関係性が乏しいように見受けられる。

諸経にもいえることだが、字門が字母習得のためであるなら、このような初学のことごらを記載する必要があるようにには思えない。また、そのような字門と儀礼に用いられる種字との関係や字門の系統の含めた本経導入の経緯など、疑問ばかりが生じる結果となった。